藤女子大学人間生活学部紀要，第 55 号：101-115．平成 30 年．
The Bulletin of The Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University, No. 55: 101-115. 2018.

あべ弘士の動物絵本

――『ライオンのよいいちにち』を中心にして――

杉　浦　篤　子[1]　久保田　知恵子[2]　清　水　貴　子[2]
柴　村　紀　代[2]　高　橋　晶　子[2]　横　田　由紀子[2]

Focusing on *Raion No Yoi Ichinichi*, an Illustrated Book by Hiroshi Abe

Atsuko SUGIURA[1], Chieko KUBOTA[2], Takako SHIMIZU[2],
Kiyo SHIBAMURA[2], Shoko TAKAHASHI[2], Yukiko YOKOTA[2]

Abstract

In 1996, Hiroshi Abe retired from Asahiyama Zoo after 25 years of service. In the following year (1997) and in 2000, he visited Serengeti National Park, in Tanzania, Africa, where he was deeply impressed by seeing various animals living in their natural state, although he was accustomed to seeing animals from having taken care of most of the animals at the zoo, including lions. Based on these experiences in Africa, he wrote a series of three illustrated books dealing with the life of lions, including *Raion No Yoi Ichinichi*. In that illustrated book, he highlighted a day in the life of a baby lion and its parent, which to him seemed reserved when surrounded by herbivorous animals living on the African savanna, even though the lion is generally regarded as the king of the beasts. Using his sense of humor, the author depicted the harsh life of wild animals by focusing on a father lion who participated in child rearing, and he depicted the landscape of the African savanna. Through this work, which is based on his experiences as a zookeeper, he was able to establish his position as a full-fledged picture book author.

〈はじめに〉

あべ弘士作『ライオンのよいいちにち』は、アフリカのサバンナを舞台にした絵本である。あべは旭山動物園の飼育係時代から絵本製作に関わっていたが、自作絵本のなかで描かれる動物たちは、動物園という環境のなかで生きる動物に限られていた。動物園を退職した翌年の 1997 年と 2000 年、あべはアフリカ、タンザニアのセレンゲッティ国立公園を訪ね、大自然のなかで生きる野生動物たちを直に見て回った。その体験から生まれたのが『ライオンのよいいちにち』（佼成出版社　2001 年）、『ライオンのへんないちにち』（同出版社　2002 年）、『ライオンのながいいちにち』（同出版社　2004 年）の 3 作である。これらライオン 3 部作は、あべの 25 年にわたる飼育係の経験とアフリカ体験が融合された作品であり、

所属：
[1] 藤女子大学人間生活学部保育学科
[2] 北海道えほん研究会
[1] Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University
[2] A research of Picture book Hokkaido

それまでの動物園ガイドを中心にした絵本から物語絵本という新たな境地を開き、動物絵本作家としての位置が固められる時期の作品と考えられる。

本稿は、それら3作のなかから『ライオンのよいいちにち』（以下『よいいちにち』と略す）を取り上げ、アフリカを舞台にした、あべの野生動物の物語化に焦点をあて、分析のポイントを①大自然の描き方　②主人公のライオン像　③ライオンの詠む俳句、以上3点に置いて考察を加えるものである。

1．飼育係から絵本作家へ

あべ弘士は1948年、旭川に生まれた。戦後、子どもたちが多い時代周囲には豊かな自然があり、北海道特有の野生動物たちも棲んでいた。「ぼくのじいさんは本州の福島県相馬から石積みの仕事をしに北海道へ移住してきた石工で、ぼくの父が石屋の跡を継いだ。長男はペンキ屋、次男のぼくの父は石屋。三男はブリキ屋、四男は電機屋。結婚した叔母の旦那は大工…というように、身うちは全員職人さん。一族がそろえば家を建てる事ができるほどだ。」と(註1) あるように、職人の血筋に生まれ、手が動く、手が覚える、ということを知っている気質を持っている。また町中が家族という関係性の中で育った。小さい頃から絵を描くのが好きで、特に「何かを描こう」というようなイメージはせず、はしのほうからこちゃこちゃとただ描いていく。手を動かしいているうちに、何かの絵になってくる。そんな描き方だった。「小学校低学年の頃にはすでに、頭に思い描いたことを設計図がなくても具現化出来ていた」とも言う(註2)。18才で叔父の鉄工所に勤め3年間働き、「鉄の塊を見ていたらジャコメッティになれる」と思ったことをきっかけに、鉄工所を辞め、絵の勉強を独学で始める。その勉強のため図書館に通い、偶然北海道にエゾオオカミがいたことを知り、生まれ育った北海道に棲む動物のことも知らないことが恥ずかしくなったと言う。そして、旭山動物園の門をたたくことになるのである。

あべは、旭山動物園に飼育係として勤務していた1989年に、『雪の上のどうぶつえん』（「かがくのとも」第240号　福音館書店、1997年『雪の上のなぞのあしあと』と改題してハードカバーで出版）を発表し、絵本作家として本格的な活動をスタートした。夜の動物園を舞台にしたこの絵本には、飼育係ならではの体験が反映されている。その後あべは飼育係の仕事を続けながら絵本製作に関わっていく。自作の絵本としては『どうぶつえんガイド』（福音館書店　1995）を飼育係時代の代表作としてあげることができる。あべは1996年、25年間勤めた動物園を退職し、本格的に絵本の世界に身を投じ、精力的に絵本製作に打ち込んでいく。動物園時代にあべは自分が描く絵のインパクト、注目を引くことを感じ取っていたに違いない。

絵本作家としての道をたどり始めたあべのアフリカ作品の最初が『ライオンのよいいちにち』である。

2．『ライオンのよいいちにち』の構成

2-1　全体の構成

この絵本は、表紙と扉絵と全16場面で構成され、サバンナの広大な草原や雲や光、また豊かな動物相が描きだす雄大な景観とともに、雄ライオンのある1日が、最終場面を除いて見開き2頁を使って描かれている。以下、各場面の絵と概要を順に追っていく。

表紙　白い雲が浮かぶ青空の下、岩山の上で休む雄ライオンの姿がクローズアップされ、タイトルは、ライオンのたてがみと同色の赤系の茶と薄い青色で手書きされている。

扉絵　大あくびをしている雄ライオンと、そのそばでたわむれる5頭の子どもたち。前景には4羽のホロホロ鳥が描かれている。紺青の青空が映画のスクリーンのような四角の枠に切り取られ、枠の下から白い千切れ雲が流れている。

第1場面　子どもたちを引き連れて草原を歩く雄ライオンの姿が画面中央に描かれている。

第2場面　子連れのメスイノシシに出会い、ライオンは子育てについてほめられるが、（わしはこども

とさんぽするのが　すきなだけだ。よけいなおせわなのだ）と思う。

第3場面　前景にヌーの群れが広がり、その向こうに小さくライオンの親子の歩く姿が見える。

第4場面　木の上で休んでいるヒョウと出会う。ヒョウに「こもりかい？」と聞かれ、雄ライオンは「まあな」と応えるが、（わしは　こうしているのが　いいのだ）と思う。

第5場面　広々としたサバンナを親子が歩いている。左頁に描かれた木の枝には前場面で出会ったヒョウが寝ている。別の枝には、ヒョウの獲物、トムソンガゼルの死体が引っ掛けられており、それを狙っているかのように、枝先にハゲタカが止まっている。

第6場面　ゾウの家族と出会う。雄ライオンの子育てを「かんしんね」とほめられるが、（わしは、ふつうに　しているだけだ）と思う。

第7場面　右頁遠景にコピエの岩山。そこを目指してライオンの親子が歩いている。

第8場面　画面中央に大きな岩山。その左斜面から親子が一列に並んで頂上を目指して登っていく。

第9場面　岩山の上で、親子は「うとうと」し始める。

第10場面　昼寝から一度目覚める。空には真っ赤な夕陽が輝き草原を金色に染め、岩山の上では、モンキーが棒を手に石太鼓を「ポンポコカンポコ…」と叩いている。

第11場面　再び目覚めると、空には月が浮かび、草原は銀色に染められている。岩山の下の池には鯉がはねており、そのうろこの形をした月明かりが映る。その光景を材にして、雄ライオンが一句俳句を詠む。「いけの鯉　黒いうろこは　月のかげ」

第12場面　夜が深まり、池ではカバたちが遊んでいる。その光景を詠んでまた一句。
「カバあそぶ　せまいお池に　月ゆれる」
左頁遠景にシマウマの群れを追う雌ライオンの姿が小さく見える。

第13場面　雌ライオンとシマウマが右頁に移動。子どもは狩りをしているのが母ライオンだと気づく。両者の距離は縮まっている。

第14場面　狩りのシーンのクライマックス。月明かりを浴びて逃げるシマウマと、それに牙をたてようとする雌ライオンの顔がクローズアップされる。雄ライオンはさらに一句ひねる。「ゆれゆられ　しろくろシマウマ　月の下」

第15場面　左頁遠景に雌ライオンが描かれ、その傍らにシマウマの死体が横たわっている。ライオンの子どもたちは母ライオンのほうに向かって、岩山を降りていく。

最終場面　視点を180度回転させ、アカシアの樹の下で獲物とともに、子どもたちを迎えようとしている母ライオンの後ろ姿が画面前方に描かれている。雄ライオンは（きょうも　よい　いちにちであった）と心で思う。

物語全体を時間と空間の変化に着目しながらたどっていくと、まず第1場面から第8場面までは昼下がりのサバンナの光景が描かれ、ライオンの親子が草原をゆっくりと散歩していく。ここであべは、各場面ごとにイボイノシシ→ヌーの群れ→ヒョウ→ゾウをはじめ、サバンナに生息する様々な野生動物たちを、空や雲などの風景とともに画面上に描いた。第8場面までは、ライオンの親子とともに読者の視点も、ゆっくりとサバンナの大草原を移動する。その8場面にわたるゆったりとした空間移動が、親子が「うとうと」と昼寝を始める第9場面を境に、定点観測へと移り変わり、空間は岩山を中心に固定される。時間の経過にともなって、岩山をとりまく風景が動き出すのである。同時に時間の進行も速度を増していく。第10場面ではいっきに夕暮れ、第11場面では夜のサバンナへと変化を遂げる。そして第12場面からライオンのシマウマ狩りのシーンに徐々に焦点があてられていく。そのクライマックスは第14場面。野生動物のテーマともいえる生きるための厳しい闘いが画面一杯を使い大写しにされ、日中ののどかなサバンナとは異なる光景が現れる。昼間のサバンナで描かれたのは、異種の動物たちとライオンとの親しい交流を軸とした平和な世界であったが、夜のサバンナでは、狩る―狩られるという弱肉強食の力関係を軸とする自然界の風景へと一変し、画面上に緊迫した光景が描きだされる。そして物語の最後は、狩りの獲物を家族で食べる、というライオン親子の平和な時間へと再び戻り、雄ライオンの（よい　いちにちであった）という感慨とともに終わる。

以上のように、あべは散歩と昼寝というライオンの習性をとおして、数日間のアフリカ滞在中に目にした多様多彩なサバンナの光景を１日に凝縮させて再現した。頁を順にめくっていくと、昼と夜の色彩、静かな月夜の下で繰り広げられる静と動、それぞれのコントラストが見るものに鮮やかな印象を残す。また第12～14場面には、雄ライオンの俳句が作中劇のように挿入されている。さらに様々な技法を駆使して変化に富んだ場面づくりをおこなっていることも注目に値する。

2-2　大自然の描き方

『よいいちにち』で主に使用している絵具は被覆力が強いアクリルガッシュ、遠景の草原には色鉛筆を使っており、時にはクレヨンも使用。場面によって自在に組み合わせている。特に、草原を吹き抜ける風をクレヨンと絵具のはじきを利用した技法で描いている。独学で絵を描くことを身に付けたあべには、画材にこだわりはなく、絵具、色鉛筆、クレヨンをその場面、場面で必要と思う効果的な使い方をする。横長の画面は多くのページで地平線の位置が高い。草原で繰り広げられる生き物を描くこともあるが、映画でいうワイド画面効果をあげており、アフリカ、サバンナの広大さを表現している。あべは『絵本作家という仕事』（講談社　2012）の中で、「私はアフリカに行った時、雲に感動しました。これはすごいと思い、ものすごく集中して、一生懸命感動しました。その感動を時間をかけて育てる。もうアフリカの雲は絶対描けるというくらい、意識的に感動を育てる感じ」と述べている。そのアフリカの空に雲が湧き上がる様子を、第１～８場面の日中の地平線のある場面で繰り返し描いている。アクリル絵の具は乾きが早い。空の青を塗り、乾燥したら雲を描く。おそらく雲は次々と湧いては消えをしたことと思われる。そしてその横では積乱雲からスコールが降り、大地を潤す。

扉絵でこの絵本全体の印象が決定しているといってよいだろう、一頭の雄ライオンが気持ちよさそうに欠伸をしており、周りに子どもたちが戯れている。それを遠巻きに見ているホロホロ鳥を前景にもってきている。アフリカとはこんなにのんびりしているのか、と思わせる。

第１場面は物語の主人公である子連れの父ライオンを中心に置き、アフリカ・サバンナの様子を一気に見せる。ライオンが通り過ぎようが、同じ平原にキリン、シマウマ、トムソンガゼルなど草食動物たちの群れが平然と草を食んでいる。動物の目はそれぞれの種類で違いがある、実際のライオンには白眼部分がない。しかし、この父ライオンの目には白眼があり、表情を作りだしている。

第２場面、イボイノシシと出会うシーンでは、ライオンはバックスタイルで描かれている。その姿はかなりのアバウトさなのだが、読者の視線は正面を向いているイボイノシシに向けられるので、そのアバウトさは気にならない。通常は近景であるライオンをしっかりと描き、中景になるイボイノシシを簡略化するのだが､焦点をイボイノシシに当て､前景をぼかす手法をとったということになる。写真を撮った時、このような画面になることは誰もが経験していると思う。

第３場面、手前にヌーの大群がいて、遠くにライオンの父子が行く。一気に画面が広がった感がある。左には大きな雨雲、その下はスコールだろう。右は、遠景の岩山の上に雲が湧き上がる。まさしくワイド画面となり、アフリカ、サバンナの草原が広がっている。以後、この風景が幾度となく繰り返される。絵本のページは180度の見開きだが、あべの目に写った360度の風景が詰め込まれている。

第４場面、ヒョウが現れ、樹上からライオンに話しかける。ヒョウ目線で描かれているので、俯瞰である。あべはこの俯瞰の場面も好きで、ライオンシリーズでは、必ず取り入れている。ヒョウの目とライオンの目の描き方を比べてみると、ヒョウの目は正面視、したがって三角に近い形で描かれている。それと比べるとライオンの目の違いが分かる。例えると、エジプトの壁画の人物の目、ピカソのキュビズム時代の女性像の目、また３歳以前の子どもたちもまたこのような横顔に正面の目を描くことに近い。

ゾウの家族と出会う第６場面では、ゾウとライオンの大きさの違いを見せる、画面の５分４をゾウに、残りがライオンである。それほど大きさに違いがある。

見開きの全15場面中（扉・最終ページを含まず）11場面が地平線のある絵となっており、前述したように、感動したこの大地、空、サバンナの風景も、動物たち同様にあべの描きたかったもののひとつである。

とても興味深いのは夜の場面があることである。第12場面では母ライオンがシマウマを追っているのを子どもたちが見つけるが、私たちが、TVなどで通常見知っているライオンが狩りをする様子は夜ではない。草食動物たちが夜に動き回っていることも想像しにくい。しかし、ネコ科の猛獣たちは夜行性のはずである。最近耳にする「夜の動物園」に行くと、猛獣たちの真の姿、活発に動き回る姿を見ることが出来るという。夜活発になったライオンに追われれば、草食動物たちは当然逃げるだろう。そこで第12～15場面の出来事が起こってくるのである。第12場面では夜の池で遊ぶカバが描かれているが、実はカバも夜行性であって、日差しの強い日中は水の中にいて、夜になると陸に上がり草を食べる。第8場面で描かれる日中の池にもカバたちがいて背中を見せており、夜の第11場面の「カバあそぶ……」となるのである。月明かりのもと、草原が銀色に光る夜のサバンナも美しい。

アフリカ・タンザニアのセレンゲッティ国立公園に行ったあべはこのような光景を実際に目にしており「この本は俳句以外、実話なのです」(註3) と言う。

3．主人公のライオン像

3-1　ライオン絵本との比較

ライオンはその風貌、特に雄ライオンの個としての存在感などから絵本の主人公として描かれることが多い。物語に登場するライオン絵本にはイソップ寓話をはじめ、やなせたかしの「やさしいライオン」、長新太の「へんてこライオン」シリーズなど数多くあるが、その中で、ライオンの生態に沿った作品として比較の対象に挙げられるのは、吉田遠志の動物シリーズがある。

動物絵本シリーズ〈1〉アフリカ『はじめてのかり』(福武書店　1982) 第1集には7冊、2集、3集と続き、全17巻を出版。第1集はライオンの家族について描かれており、吉田は「例えばライオンについて描くときには、ライオンの生態の細部にまで踏み込み、その運命を飾り立てることなく再現しようとしました。大自然の中で生きる彼らの生涯は、知れば知るほど劇的で、ありのままの姿がそのまま物語となりうるものだからです。」と『はじめてのかり』の見返し部分に記している。吉田は洋画家の両親を持ち、自身は日本版画家協会の会員であり、木版画を主として制作をしている。これまでに世界中を旅し、各地の野生動物を描いてきたこともあり、後年、木版画だけではなく様々な技法も使い、作品もいろいろな物を作っている。1957年から絵本「野生動物シリーズ（アフリカ）」を手掛ける。野生動物シリーズでは、『はじめてのかり』の扉絵に非常に精緻なタッチで制作された「ライオン」が木版画で描かれている。全体の絵はリトグラフであろうか、あるいはクレヨン、クレパスのタッチに見える描法で描かれている。特に、全速力で駆け抜けるインパラを追うチータ、追われるヌーはアニメーションや映画のコマの早送りを見るような特徴的な描き方である。

吉田が描くライオンは、ライオンという種の姿であり、個性を持たせてはいないし、ライオンがどう思っているかなどの感情移入はしていない。どの動物に関しても同様であり、あくまでも野生動物の観察絵本を目指したものである。あべが描いた俳句を詠むライオンとの大きな違いがそこにある。

1979年4月に福音館書店から出版された『らいおん』(かがくのとも121号　金尾恵子作・増井光子監修) を見ると、描かれた趣旨は吉田と同じく観察であり、野生動物としてのライオンの生き様や狩りの様子を伝えるために描かれている。監修の増井光子氏はかつて多摩動物園や上野動物園他の園長を歴任した獣医師である。狩りをする雌ライオンに焦点を当てており、あべの描く「子どもをつれて散歩をするのが好きだ」と、独白する父ライオンの姿はない。吉田ライオン、金尾ライオンとあべライオンを比較すると、あべが描いた俳句を詠むライオンとの違いがそこにある。

3-2　あべ弘士のライオン像

前述の2作と同様に、『よいいちにち』の主人公、雄ライオンも、アフリカに生きる野生のライオンである。ライオンは動物園がつくられた初期の頃から野生動物の中の野生動物、まるでヒーローのように扱われてきた。したがってライオンは強くなければならなかった。また強いがゆえに孤独でなければな

らなかった。このようなライオン＝百獣の王というイメージは、現在でも人々の中に継続されていると思われる。しかし、実際アフリカのサバンナで生きる様子を見たあべは、それが違ったと言う。そこで「百獣の王」という最大公約数的なイメージとはかけ離れたライオンをこの作品の主人公におき、大自然のなかで生きる様子を描いた。主人公は子連れで散歩と昼寝を楽しみ、さらに俳句をひねる、という風雅な趣味を持つ個性的な雄ライオンだ。その像と暗黙のうちに読者が抱いているライオン像との乖離に、この作品の最大のおもしろ味があると言えるであろう。

ただし、動物園の飼育係として動物たちを知り尽しているあべは、絵においても文章においても、それぞれの動物の属性に従った絵本作りを基本としており、この作品においても、あべは種としてのライオンの生態や習性を基調として展開していく。したがって、主人公の雄ライオンも、あべの２度にわたるアフリカ体験から生まれた、ライオンの習性や生態に根差したイメージといえる。

あべはアフリカ訪問について次のように述べている。

> キリンもダチョウもシマウマも、動物園で毎日会っていた動物です。でも、こんなにたくさん、目の前にいるなんて、うれしくてうれしくて。そのうちあることに気がつきました。草食動物たちが、どうもいばっているように感じるのです。ヌー、シマウマ、インパラやトムソンガゼル、じつに堂々と、ゆったりとしています。それに比べ、ライオンやチーターは、なんだか遠慮がちに見えました。草食動物はものすごい数です。なかにはいろんな問題もあるでしょう。ケガとか病気とか老いとか人口問題とか。だから、それらの解決策のひとつとして、ライオンたちがいるのです。ここに来るまでは、いわゆる弱肉強食、ライオンは強く、弱いインパラを食べる、そういった一般概念を持っていたのですが、すぐにひっくりかえっちゃいました。ライオンやチーターの応援にまわりました。それに狩りの成功率なんてとても低いしね。……サファリカーの上で、そんなことぼんやり思いました(註４)。

以上の言葉に示されているように、数の上では圧倒的多数をほこる草食動物を目の当たりにしたあべは、ライオンがその数の調整者であるという視点を得た。しかし、狩りの成功率の低いこと、また悠々たる草食動物と比べて「遠慮がちに見え」たことから、ライオンに共感を寄せ、応援したくなるようなライオンを描きたくなった。散歩と昼寝でのんびりと１日を過ごすという、強さとは異なる要素をライオンの生態から選び取り、ユニークな主人公像をつくり上げた背景には、このようなアフリカでの体験がある。

また、このライオン像の着想のもとには、飼育係ならではの経験も含まれている。主人公の雄ライオンのユニークな特徴のひとつとして、いつも子どもを連れて行動するという父親的要素をあげることができる。一般的には認知度の低い性質ではあるが、あべによると、「けもののなかでライオンのお父さんだけがちょっと子育てに参加していた」(註５) と述べ、その例として、旭山動物園で雄ライオンと子どもを一緒にしたところ、寒い日に、子どもがお父さんのたてがみにもぐり込むなど、雄はやさしい父親ぶりを発揮していたというエピソードを紹介している。またアフリカでも、プライドと呼ばれる群れのなかで母ライオンを含む雌たちが狩りを担当し、その間、父親は子どもとじゃれあうなど、比較的のんびりと過ごしていたとも述べている。

このような雄ライオンがもつ特徴を生かしつつ、さらにあべは「子育てはしなければならないとか、ほめられたいからするのではない。好きだからするのであって、他人がとやかくいう問題ではない」(註６) という自分の考える父親像を雄ライオンに託すことで主人公像をつくりあげた。それは、子育てをほめる動物たちとの会話のなかで、「(わしは、こどもと　さんぽするのが　すきなだけだ。よけいな　おせわ　なのだ)」(第２場面) という雄ライオンの独白としてカッコ付きで表現されている。また、『ライオンのへんないちにち』では、群れから離れて一匹で遊んでいるシマウマの子どもに対して「(まったくあぶないったら　ありゃしない)」(第４場面) と心配し、「ぼうや、はやく　かえんな。」(第５場面) と声をかけるやさしさをみせている。これらの独白的表現によって、本来もっているライオンの父親的な要素がよりいっそう誇張され、主人公は野生のライオンでありながら、他のライオンとは異なる個性が付与されることとなる。

以上述べてきたように、あべは、飼育係としてあべの記憶のなかにあるライオンと、アフリカで新たに発見したライオンの生態や特徴を土台にし、さらにそこにあべの個性を混じり合わせてライオン像を創出した。したがって、この主人公は、動物の生態観察に基づいた事実と作者の想像とが融合されて誕生したイメージといえる。そしてそのことが「俳句を詠む」ことへと繋がっていくのだが、それについては次に述べていく。

4．ライオンの詠む俳句をめぐって

4-1　あべ弘士の擬人化表現

動物が登場する絵本では、動物に人間と同じような言葉や思考を与えたりする擬人化表現はよく使われる手法である。『よいいちにち』でもあべは、動物たちに人間と同じ言葉を与え、俳句まで詠むという擬人化されたライオン像をつくり上げた。ただし、長年にわたって動物たちと深く付き合ってきたあべによる擬人化は、動物とそこまで接した経験のない作家たちの擬人化とは質を異にする。そのことに関して、雑誌のインタビューを受けた際、あべは次のように答えている。

> ……結局ね、日本語で会話してんですよね、かれらと。ヤマアラシも日本語で返してくる。シロフクロウのお父さんがね、いやぁおれね、この子ら好きなんだわぁ、って日本語で言ってくるわけよ。―中略―だから、いわゆる擬人化以前の問題かなあ。動物園の飼育係を通して、動物と会話を、対話とずーっとしてきた。日本語で。何かね、動物という意識はないのね。もちろん人ではない。そういう感じで常にかれらの性格とか生き方とか、直接もだし、間接にも本とか人から聞いたりとか。ま、形としては掃除をしたりさわったり、そうやって動物と接してたけど、精神的には今言ったみたいに会話してたね。日本語で。―中略―そうして対話していくと、聞こえてくるのね。かれらが何をどうしてほしいか。それをずっとしてきたかもしれないね(註7)。

以上の言葉は、あべが動物たちとどれほど深く心を通いあわせて接していたかを示していよう。あべは、動物―人間という種を分かつ境界を越え、同じ命をもつ生きもの同士という感覚をもって動物たちと交流していたのではないだろうか。「日本語で対話をしていた」「動物たちの声が聞こえてくる」という現象は、人間対動物というような、明確な線引きを前提にした人間中心の発想から生じることはないからである。

このように動物たちと対等に接してきたあべは、絵本の世界で動物たちに人間と同じ言葉や思考を与えはしても、動物の生態や特徴を無視した人間化はおこなわない。逆にあべ弘士の擬人化は、あべが心理的に動物に近づき、動物とひとつながりになって、「もしも動物が人間と同じように言葉を話すことができたら、こんなふうに感じ、こんなふうに話をするのではないか」というように、動物の目線に立つことから生まれた表現である。そこにあべの擬人化の特徴がある。したがって、作品のなかで雄ライオンの詠んだ俳句も、あべがつくった句でありながら、同時にそれは、あべの言葉をとおした、野生の生きものたちの生き様の表現でもあると考えることができる。また、俳句を詠むことで、雄ライオンの絵本の主人公としての存在感が存分に発揮されることになる。彼は百獣の王という通念でくくられる存在としてではなく、一頭の個性をそなえた表現者として、自分の感性でみたサバンナの情景をうたったからである。

4-2　あべ弘士と俳句

では、あべはなぜ、作品のなかで俳句という表現手段を用いたのであろうか。あべと俳句との関わりは深い。2011 年 4 月にあべが旭川市で立ち上げた NPO 法人「かわうそ倶楽部」では、毎年子どもたちと自然や動物を素材にして俳句をつくる句会を企画している。またあべは、フクロウやカワウソ、キツネやゾウなど、動物たちが集まって、それぞれがつくった俳句を披露する『どうぶつ句会』（あべ弘士作　学習研究社　2003)、『どうぶつ句会　オノマトペ』（同作家　同出版社　2007）などユニークな趣向の絵本を刊行している。その原点にあるのは、小学校の低学年から高校まで百人一首に熱中した経験で

ある。七五調のリズムと言葉が自然に結びついている世界に没頭した経験は、現在でも日常的に俳句をつくって楽しむという趣味へとつながり、そのことが、絵本製作の上でも絵だけに限らず、言葉やリズムという耳に心地よい絵本の言葉を大切にしている因をなしている。

ここで、『どうぶつ句会』からいくつか俳句を紹介したい。

「雪つもる　白白白白　消えてゆく」　（シロフクロウ　雪野　袋　作）

「舌さわぐ　鰊（にしん）鮭鱒鱈（さけますたら）鮃（ひらめ）」　（カワウソ　河うそ雄　作）

「たべたいな　キリマンジャロの　かき氷」　（アフリカゾウ　大耳はな　作）

これらの俳句は、口語俳句(註8)と呼ばれる「軽み」を主とした俳句のジャンルである。したがって深刻ぶった句はひとつもなく、どれも読むものを笑いに誘うユーモアあふれる句であるが、その衒いのないユーモラスな表現のなかに、それぞれの動物の個性が表れている。「雪」や「食べ物」など句をなす素材は、子どもたちに身近でイメージを広げやすく、自然と動物たちへの親しみの感情を生むであろう。これらの個々の動物の生活に即した俳句は、あべがその動物になりきって、もの言えぬ動物に代わって生活感情を生き生きとうたった句であり、動物を知らぬものには作り得ない世界である。前章で『よいいちにち』の雄ライオンの父親ぶりには、あべの個性が含まれていると述べたが、それ以上に俳句を詠むという意表を突くライオン像のなかに、最もあべらしいユーモアが含まれているといえよう。

4-3　ライオンの俳句

次に『よいいちにち』のなかでうたわれた雄ライオンの俳句について考察していく。作品のなかで雄ライオンは、①「いけの鯉／黒いうろこは／月のかげ」（第11場面）、②「カバあそぶ／せまいお池に／月ゆれる」（第12場面）、③「ゆれゆられ／しろくろシマウマ／月の下」（第14場面）の3句を詠む。①は、月明かりが鯉のうろこのような模様を池の水面に映す光景、②は、夜行性のカバが池で水遊びをしている光景、③は、雌ライオンのシマウマ狩りの光景と、どれも夜のサバンナの情景を静かに詠った句である。まず、「ポンポコカンポコ…」と鳴り響くモンキーの石太鼓の音が、岩山の上でくつろいだ気分に浸る雄ライオンのなかから五七五のリズムを誘い出す。そして月、池、シマウマ、カバと俳句が生まれる材料を得たライオンが3句を詠み、「（きょうも　よい　いちにちだった）」と満足して一日の終わりを迎えるという設定である。3句ともに「月」が出てくる。地上ではまさに雌ライオンの狩りが展開されているのに対し、雄ライオンは、岩山の上で、はるか中空の月を見ている。そこには地上の殺伐から離れた静謐がある。

特に3つの句のなかで印象的なのは、「狩る―狩られる」という野生の世界の厳しい事実を素材にしながら、それとは別次元を詠った②の句である。絵では、必死で逃げるシマウマと、そのすぐ背後から牙をたてようとしている雌ライオンがクローズアップされ迫真的に描かれるが、俳句は、「ゆれゆられ…」のゆったりしたリズムに乗って、シマウマの逃走を月の光で包みこみ、優しい印象を与える。このように、狩りの光景を素材にしながら、その厳しさから焦点をはずし、もっと大きな悠久の時の流れに目を転じたところに、大自然に寄せるあべの共感の思いを読み取ることができる。あべは、月やその光を映す池、またそこでカバが水遊びする姿と同じように、狩りの光景も大自然の営み、その生命の発露として、あるがままの姿をライオンに託してうたいあげたのである。そこに、サバンナの大自然や野生動物の生命の営みに直に触れたあべが達した「人間が関わらない死はすべて正しい」(註9)という境地をみることができる。アフリカ体験によって得た、そのあべの自然観が、雄ライオンが最後に満足して独り言つ「（きょうも　よい　いちにちだった）」という言葉に含まれているのである。

5．おわりに

あべはアフリカ体験から刺激を受けて『よいいちにち』を創作した。あべは数日間のサバンナ滞在中に目にした光景を1日に凝縮し、様々に技法を駆使して多様多彩なサバンナを画面上に再現した。そのサバンナの主人公として選びだしたのが、あべが共感を寄せたというライオンである。あべはライオン

の習性や生態を中心に据えながら、王者としてのライオンではなく、父親らしさを発揮し、また俳句づくりを趣味とする、あべ自身と重なる個性的なライオン像を創り出した。そのライオンをとおして、あべが読者に伝えようとしたのは、自然界のありのままの姿である。長年勤めあげた動物園を飛び出し、アフリカという大自然に触れ、大自然とそこに生きる野生動物たちの生命の営みに共感、共鳴したあべが、ライオンに託して、その感動を表現したのが『よいいちにち』という作品なのである。したがってこの物語は、あべのアフリカ讃歌であり、あるゆる地球上すべての生命讃歌だといえる。そして物語の根底には「自然界と人間をつなぐ通訳者」(註10) と自称する、あべの使命感が横たわっている。

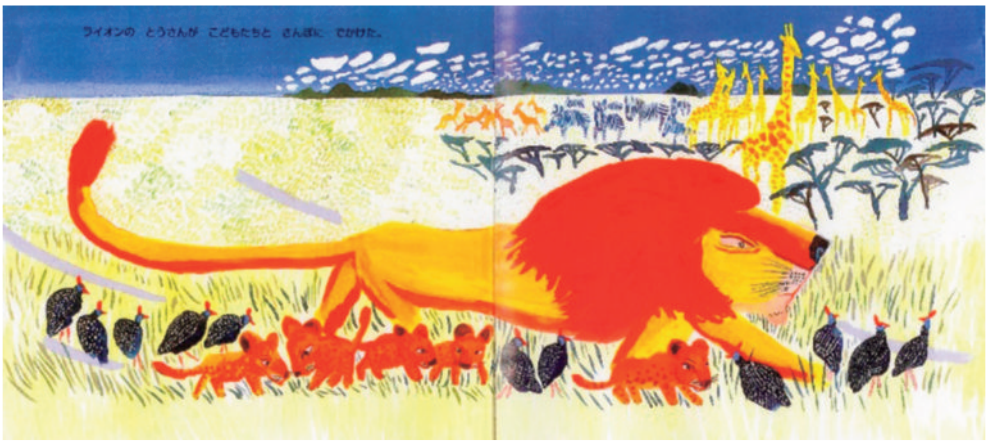
一般には動物園でしか見ることのできない野生動物の生きる様をあべ流に物語化したこの作品は、動物園の飼育係として動物と深く関わり、さらに、アフリカを訪れ、大自然を体感したあべ弘士だからこそつくり得た絵本世界である。

あべ弘士　『ライオンのよいいちにち』図版

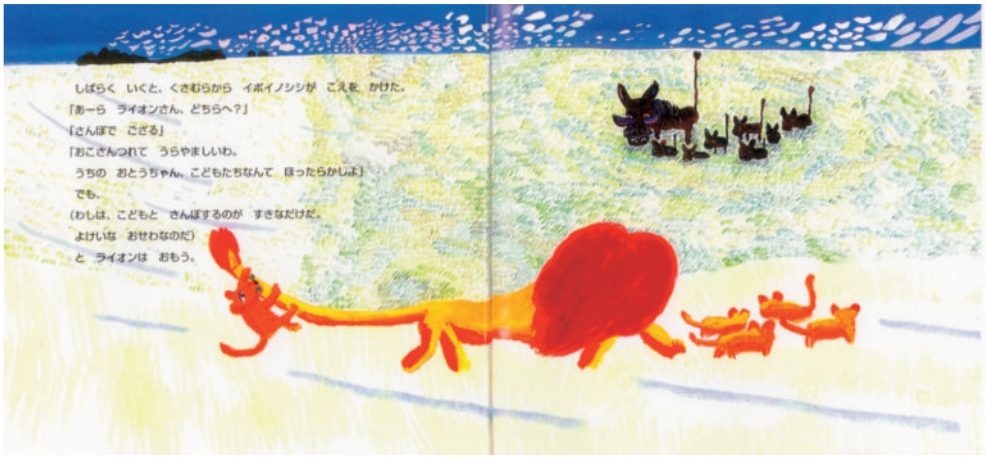
1．表紙

2．扉

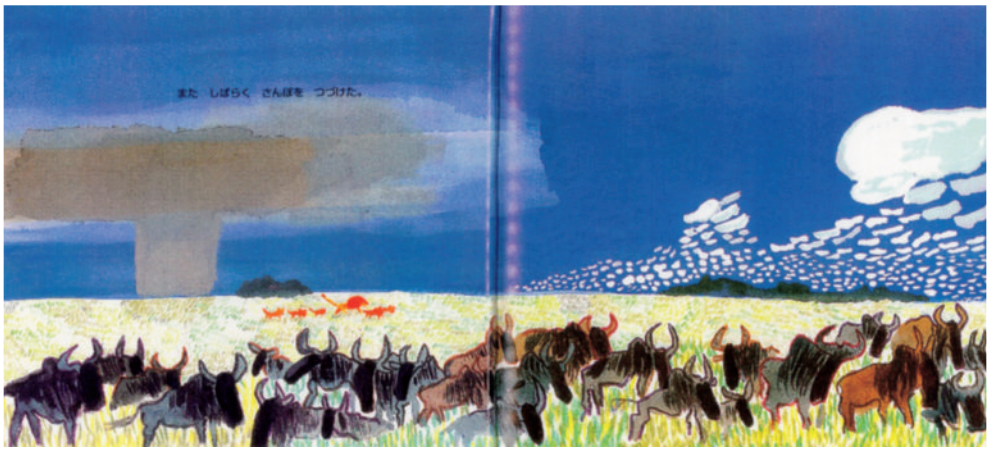
3．第1頁



4．第２頁



5．第３頁



6．第４頁

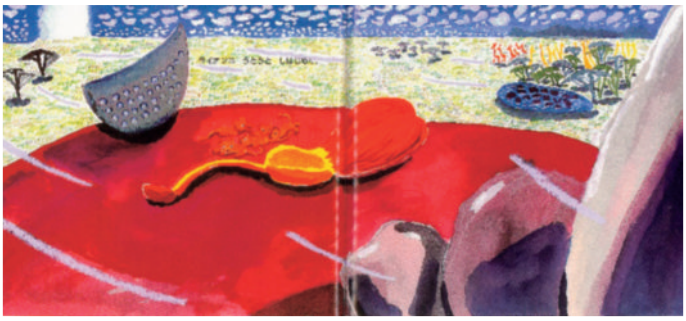
7．第５頁

8．第６頁

9．第７頁

10．第８頁

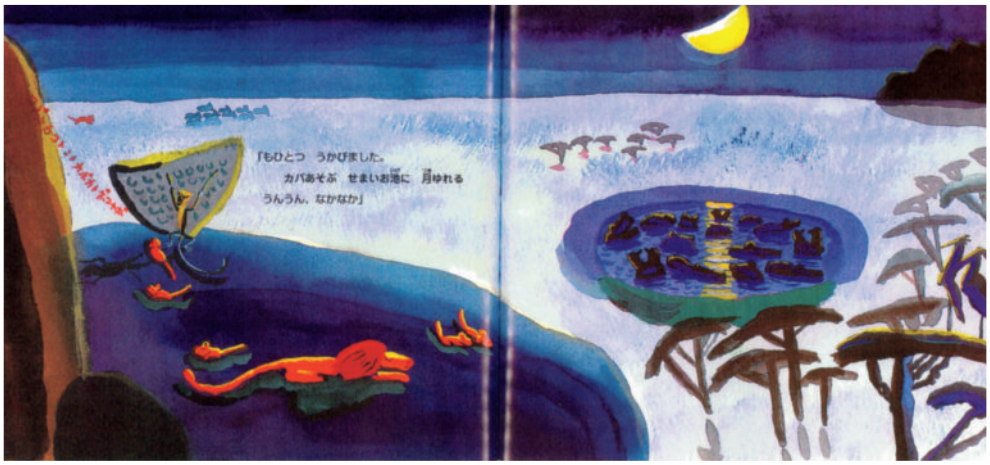
11. 第 9 頁



12. 第 10 頁

13. 第 11 頁

14. 第 12 頁



15. 第 13 頁

16. 第 14 頁

17. 第 15 頁

18. 第 16 頁

註

1　『絵本作家という仕事』講談社　2012 年 4 月　pp.6
2　同書　pp.11
3　「私の新刊『ライオンのよいいちにち』── ライオンはえらい」『こどもの本』第 308 号日本児童図書出版協会　2001 年 4 月　pp.4
4　同書同頁参照
5　『あべ弘士　ART BOX　動物たち』あべ弘士編・著　講談社　2007 年 3 月　pp.94～95
6　『別冊太陽　絵本の作家たち』平凡社　2005 年 5 月　pp.85～87
7　同書同頁参照
8　口語俳句　坪内念典に代表される無季で季語の文語の「や」「かな」「けり」などを使わず口語で表現された俳句
9　『動物の死はかなしい？　元動物園飼育係が伝える命のはなし』あべ弘士著　河出出版社　2010 年 8 月　pp.158～162
この本はアフリカ体験の後に上梓されたあべ弘士のエッセイである。あべ弘士は「『狩りをする強いライオン』『狩られる弱いシマウマ』という構図は、一見弱肉強食に見えるけれど、本当は違う。ライオンもシマウマもどっちも正しい“生”と“死”の関係を生きているだけだ」と述べ、常にバランスの上に成り立っている自然界について「人間の関わらない死はすべて正しい」と述べ、自身の自然観を示した。
10　『絵本作家という仕事』講談社　2012 年 4 月　pp.14

参考文献・引用文献

・『絵本作家という仕事』講談社　2012 年 4 月
・『別冊太陽　絵本の作家たちⅡ』平凡社　2005 年 5 月
・あべ弘士／著『どうぶつの死は、かなしい？　元動物園飼育係が伝える命のはなし』河出出版社　2010 年 8 月
・「あべ弘士×長谷川義文　ボクらの絵本」『飛ぶ教室』第 27 号（2011 年秋号）光村図書出版　2011 年 10 月
・「特集　あべ弘士の作品世界」『子どもと読書』７・８月号（第 412 号）親子地域文庫全国連絡会編集発行　2015 年 6 月
・『こどもの本』日本児童図書出版協会　2001 年 4 月
・あべ弘士／文絵『どうぶつ句会』学習研究社　2003 年 4 月
・あべ弘士／文絵『どうぶつ句会　オノマトペ』同出版社　2007 年 4 月
・あべ弘士／編著『あべ弘士　ART BOX　動物たち』講談社　2007 年 3 月

・吉田遠志／文絵〈絵本　アフリカのどうぶつたち◆第１集　ライオンのかぞく〉『はじめてのかり』 2001 年 4 月
・金尾けいこ／作　増井光子／監修『らいおん』福音館書店　1979 年
・坪内念典／著『俳句のユーモア』講談社選書メチエ　1994 年 4 月

＊図版については、作家並びに佼成出版社から掲載許可を得た。